令和5(2023)年12月25日

令和5(2023)年12月5日実施のタンチョウ越冬分布調査結果について

正富宏之

2023 年 12 月 5 日に行われた令和 5 年度第 1 回タンチョウ越冬分布調査結果について、従来と同様に動物園および類似施設の飼育個体を除き、野生個体のみを対象としてコメントを記しておく。

Ⅰ. 分布域

A) 今年の状況

調査は空知総合振興局(以下総合・振興局を省略)、石狩、胆振、日高、留萌、宗谷、オホーツク、十勝、釧路、根室の 10 管内で行われ、管内数は前年と同じながら、前年の後志の代わりに、今年は留萌が含まれた。このうちタンチョウが目撃されたのは、留萌、石狩、オホーツクを除く 7 管内で、石狩とオホーツクは前年に続き目撃記録がない。

調査した市町村は 6(7)市(以下カッコ内は前年の数値)、35(36)町、3(3)村の計 44(46)自治体で、そこに 351 地区の調査地区を設け、そのうち 161 地区でタンチョウが目撃された。従って、タンチョウが記録された調査地区割合は 45.9%を示し、3(4)市、22(21)町、1(1)村の計 26(26)自治体で目撃されたから、調査を行った自治体の 59.1(56.5)%で生息が確認されたことになる。

確認地区数が最も多いのは釧路管内の 97 地区で、管内調査地区数の 60.2%を示し、次いで十勝 43 地区の 26.7%、根室 13 地区の 8.1%の順で、この 3 者で確認地区数全体の 95.0%を占めた。

また、市町村別の確認地区数は釧路管内の鶴居村が最も多い 42 地区で、全確認地区数の 26.1%を占めた。次いで釧路市が 24 地区で 14.9%を示し、標茶町が 15 地区で 9.3%、十勝管内の浦幌町が 13 地区で 8.1%、幕別町が 8 地区で 5.0%、広尾町と豊頃町が 7 地区で 4.3%などとなる。

B) 前年(令和 4 年)との比較と今年の特色

タンチョウの生息が記録された振興局数は前年同様に 7 局であるが、今年の調査時に目撃記録が得られなかった石狩とオホーツク両管内でも、実際には調査日前後に生息が確かめられている。従って、タンチョウ生息管内数は昨年と同じ 9 管内ながら、今年は石狩管内での新規繁殖の確認といった定着現象も起き、全道的に見た分布に緩やかながら拡大の傾向が認められる。

また、鶴居村・釧路市・標茶町という釧路管内の 3 自治体の合計数は、全体の確認地区数の約5割(50.3%)を占め、調査時点の結果からは、依然として釧路管内への地域的集中は改善されていないと言える。

しかし、同一管内で、前年と今年で確認数がかなり異なるところもある。その代表が十勝管内の浦幌町で、前年の確認地区数 2 に対し、今年は 6.5 倍の 13 地区で記録され、目撃羽数も 5 羽から一挙に 69 羽へ増加した。ただし、浦幌町の 2021 年の調査では 19 羽を記録しているし、昨年は近隣の大樹・幕別の両町で合わせて 144 羽が目撃されたのに、今年の両町の記録は 93 羽を数えるに留まっている。従って、年による個体の移動が確認地区数変化の主要因の可能性があるほか、確認地区数が十勝管内全体で前年より 9 地区も多いのに、両年の目撃羽数はほぼ同数のため、調査時にタンチョウが前年より管内に分散していたと考えられる。

いずれにしても、調査地区数に対する確認地区数の割合は、主要な生息地の十勝・釧路・根室のいずれの管内でも昨年を上回っており、北海道全体を見ても緩やかながら分布の拡大が進行していると思われる。しかし、より確実な判断は来年以降の調査結果を見る必要があろう。

Ⅱ. 羽数

A) 今回の記録羽数

確認された羽数は 1,049(933)羽(以下カッコ内は前年の数値)で、そのうち今年生まれの幼鳥が 115(98)羽である。しかし、成鳥・幼鳥不明個体が総数に 16(17)羽含まれるため、実際の幼鳥数は記録数を少し上回るかもしれない。

管内別羽数は配布資料の如くで、全体羽数における各管内の割合は、多い順に釧路 72.1(71.6)%、十勝 19.9(21.2)%、根室 5.5(5.4)%、胆振 1.0(0.6)%、宗谷 0.8(0.2)%、日高 0.4(0.6)%、空知 0.3(0.3)%となり、釧路・十勝・根室の 3 管内で全体の 97.5(98.2)%を占める。

調査を行った 44 市町村別に、目撃された羽数を多い順に 10 ヵ所挙げると、鶴居村 286(280)羽、釧路市 217(130) (このうち阿寒町 128(27)、音別町 53(61))羽、標茶町 169(150)羽、大樹町 69(90)羽、浦幌町 69(5)羽、浜中町 37(54)羽、白糠町 33(14)羽、別海町 32(18)羽、豊頃町 28(29)羽、幕別町 24(54)羽となる。

上記の上位 3 位までの羽数を分布割合で示すと、鶴居村が 27.3(30.0)%、次いで釧路市が 20.7(13.9)%、標茶町 16.1(16.1)%となり、上位 10 自治体の合計数が目撃数全体の 91.9(91.4)%を含むことになる。また、上位 10 自治体で記録された羽数を振興局別に集計すると、釧路管内が 5(5)自治体 742(642)羽で全体の 70.7(68.8)%、十勝管内が 4(3)自治体 190(173)羽で 18.1(18.5)%、根室管内が 1(2)自治体 32(38)羽で 3.1(4.1)%となる。

なお、今年は 115(98)羽の幼鳥が確認され、総数(成鳥・幼鳥不明数を除く)に対する割合は 11.1(10.7)%を示した。振興局別では、釧路が 77(74)羽で管内記録数(成鳥・幼鳥不明数を除く)の 10.4(11.4)%、十勝が 26(16)羽で 12.4(8.1)%、根室が 7(6)羽で 12.1(12.0)%、その他が 5(2)羽で 19.2(11.8)%となる。市町村の総目撃羽数が多い順の 5 ヵ所とその他で幼鳥数の占める割合を挙げると、鶴居村が幼鳥 33(27)羽で、村内の総記録数(成鳥・幼鳥不明数を除く)の 11.5(10.0)%を示し、次いで釧路市 20(21)羽で 10.5(16.8)%、標茶町 19(11)羽で 11.4(7.4)%、浦幌町 10(1)羽で 14.5(20.0)%、大樹町 8(5)羽で 11.6(5.6)%、その他 25 羽で 10.7 %などである。

B) 前年との比較を含めた今回の特徴

今回記録されたタンチョウは 1,049(933)羽で、前年より 116(32)羽多いが、過去最多を記録した 2019 年の 1,215(幼鳥 123・不明 78 を含む)羽には 166(282)羽及ばない。

振興局別に確認羽数を前年と比べると、主要分布地の釧路・十勝・根室のいずれも前年の記録を上回るが、増加実数は十勝が 11 羽、根室が 8 羽とわずかなのに対し、釧路は 88 羽と多い。各振興局により調査の実態が異なるため確かなことは言えないが、調査精度向上が認められる根室・十勝両管内の確認数が昨年同様のレベルであることから、主に釧路で見落とされていた個体が新たに確認されたのが一つの理由かもしれない。

このことは、季節の進み具合等で年により変化するタンチョウ所在場所を、調査時期になるべく的確に把握して調査対象とすることが、より確実なタンチョウの分布と個体数把握を行うのに重要であることを示している。特に釧路管内にある三大給餌場（中雪裡・下雪裡・阿寒）では、給餌量削減・給餌開始時期設定等により、ある程度の個体が、本調査時期に周辺へ以前より分散している可能性もあり、その実態を把握しておく必要があろう。

今回は幼鳥が前年より 17 羽多い 115 羽目撃されており、総数に対する幼鳥割合（繁殖率）も前年より 0.4 ポイント高く、今回の調査結果からは、繁殖状況は比較的良好であったと言える。振興局別にみて、根室・十勝に比べて釧路の割合がやや低いのは、一般に幼鳥連れの家族は比較的遅くまで繁殖時の縄張り内で暮らし、越冬期に大きな群れをつくる釧路へはやや遅れて加わる傾向を示すからに他ならない。ただ、今回の羽数記録を基にした幼鳥割合は、道内に現存する個体群よりかなり少ない羽数を基にした値であるため、より実態に即した繁殖率は、第 2 回の調査結果を参照すべきである。

Ⅲ. 提言

A) 調査地区数の増加と調査方法

まず調査に関与された道の担当職員並びに現地で実際に調査に参加された多くの方々の労に、深甚より感謝の意を表したい。なかでも、根室管内において調査対象地区の見直し等により、より実態に近い成果が得られたことは、その調査を担当された方々のご努力のたまものと、心から賛辞をお送りしたい。

しかしながら、目撃羽数が実態よりもかなり低いことを考えると、他地域でも調査方法には一層の改善の必要があると思われる。根室のみならず、タンチョウの生息が想定される全ての振興局で、年変化に応じた調査地区数や調査対象地の変更、それに見合う調査協力者の確保が必要であろう。さらに、それを補う手法として、個人ないし機構・団体等から事前により広く情報を集める工夫など、様々な情報収集方法の検討・実行も必要である。今回も、折角一般からの情報収集の試みが計画されながら、実施できなかったことは残念としか言いようがない。

ただ、前回も記しているが、道東の管内において事前情報収集不十分のため、タンチョウの存在が今年も記録されなかった事例がある。同管内には野鳥やタンチョウについて情報をお持ちの方も多くおられるゆえ、早急な改善を望んでおきたい。

B) 環境教育としての事業参加

これについては、繰り返し提言してきたが、何も進展が見られない。昨年の提言をそのまま再度記しておくが、ぜひ改善の策を講じていただきたい。

つまり、タンチョウは個体数増加に伴い分布域を広げつつあり、単に釧路市の阿寒町や鶴居村だけが、調査参加可能な地域なのではない。各地域における学校・教育機関・関係者が郷土の自然理解のための手がかりとして、調査参加を有効利用していただきたい。また、今回の調査結果を報道されるメディアの方にも、単に羽数や分布のことのみならず、この調査の環境教育的意義のあることを、少しでも理解していただけるような報道をお願いしたい。